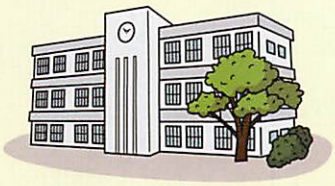
教職員向け資料

子ども理解支援ツール「ほっと」
～ 児童生徒理解の充実に向けて ～

北海道教育委員会（平成28年３月）



教科指導、生徒指導をはじめ、様々な場面での教育活動において、教育実践が成果を上げるための大前提の一つは「児童生徒理解」です。人は、理解してくれている人には安心して心を開きますが、理解してくれない人に対しては、拒否的になり、心を閉ざしたまま対応してしまいがちです。

つまり、児童生徒を共感的に理解することが必要ですが、誤った理解や独善的な理解を避けるため、できるだけ多角的・多面的でかつ客観的な資料が得られるよう、努めなければなりません。

北海道教育委員会では、「児童生徒理解」の充実を図るため、児童生徒のコミュニケーションスキルを測定する「子ども理解支援ツール『ほっと』」を、平成24年６月、北海道医療大学と共同して開発しました。

1　子ども理解支援ツール「ほっと」とは

子ども理解支援ツール「ほっと」（以下「ほっと」という。）は、児童生徒のコミュニケーションスキルの状況を発達の段階に応じて測定することができるツール（質問紙調査法）です。「ほっと」はどのような特徴をもっているのでしょうか。

①「ほっと」の特徴

これまで、学校や学級への適応感を測定する尺度など、多種多様な質問紙調査法が開発されていますが、「ほっと」は次のような特徴をもっています。

①コミュニケーションスキルを網羅的に測定することができること。

②発達の段階に応じたコミュニケーションスキルを測定することができること。【小学校低学年、中学年、高学年、中学校、高等学校の５段階】

③北海道の教職員の経験を考慮した質問項目であること。

②「ほっと」の名称の由来

①子ども同士が、ほっとできる人間関係を築くことができるよう支援するツール

②子ども同士が「ＨＯＴ」な人間関係を築くことができるよう支援するツール

③教員がほっと一息入れて、学級や学年の子どもたちを見つめ直すことができるツール

④Hot Opportuniy for Ties（絆をつなぐための新しい機会となるツール）

質問紙「振り返りシート」の例【小学校中学年】

【 0:男 ・ 1:女 】 どちらかに○をつけてください。		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
1	先生や友だちにあいさつをすることができる。	4	3	2	1
2	何かをしてもらったときに、「ありがとう」と言える。	4	3	2	1
3	自分の考えを友だちや先生にわかりやすく説明することができる。	4	3	2	1
4	自分から友だちをさそって遊ぶことができる。	4	3	2	1
5	友だちと助け合って、当番や係の仕事をすることができる。	4	3	2	1
6	うまくできない友だちのことを考えて活動することができる。	4	3	2	1
7	困っている友だちがいたら、手伝ってあげることができる。	4	3	2	1
8	自分がしてほしくないことは「やめて」と言える。	4	3	2	1
9	みんなの前では、きんちょうしてうまく話すことができない。	4	3	2	1
10	がんばっている友だちをほめることができる。	4	3	2	1
11	学校のきまりや遊びのルールを守ることができる。	4	3	2	1
12	よくないことをしている友だちに注意することができる。	4	3	2	1
13	自分の思い通りにならないときでもがまんすることができる。	4	3	2	1
14	自分勝手な行動はしない。	4	3	2	1
15	クラスのことを考えて行動している。	4	3	2	1
16	友だちと協力して学習することができる。	4	3	2	1
17	じゅ業で使ったものをていねいに片付けることができる。	4	3	2	1
18	わからないことを、先生や友だちに聞くことができる。	4	3	2	1
19	学校であったことやがんばったことを家族に話すことができる。	4	3	2	1

※「振り返りシート」には、次のものがあります。
「小学校低学年用」「小学校中学年用」
「小学校高学年用」「中学校用」「高等学校用」

平成24年６月に開発・配布した「ほっと」ですが、学校からの意見を踏まえ、適宜、ソフトの改善等を行っています。現在は、平成26年６月に開発・配布した「ほっと 2014」を運用しています。

2 コミュニケーションスキルとは

「ほっと」は、児童生徒のコミュニケーションスキルの状況に焦点を当てたツールですが、そもそも、測定することができる「コミュニケーションスキル」にはどのようなものがあるのでしょうか。

「コミュニケーションスキル」の13要素と因子

コミュニケーションスキルは、先行研究から、次の13要素に分類することができます。

13要素	略称	要素の説明
挨拶や感謝	礼儀	挨拶や「してもらったこと」への感謝ができるか。
発言や説明	表明	意見や欲求を主張できるか。
仲間づくり	参加	対人参加や、仲間と協調することができるか。
思いやり	配慮	相手への配慮や親切、援助ができるか。
拒否	拒否	断ることや、他者からの無理な働きかけに「やめて」と言うことができるか。
緊張	緊張	緊張や不安によって話せなくなることがあるか。
称賛	称賛	相手をほめたり喜ばせたりすることができるか。
ルールやモラル	遵守	規則や秩序を維持したり、不適切な行為を謝罪できるか。
助言や注意	忠告	社会的な望ましさを促進する働きかけができるか。
自律	自律	協調性や我慢などの自律的な行動ができるか。
リーダーシップ	率先	集団をまとめることなど、リーダーシップ行動ができるか。
学業	学業	学習に関連した望ましい行動ができるか。
相談	相談	相談や自己開示ができるか。

コミュニケーションスキルの13要素について、相関の高い要素を因子としてまとめると、次のように分類することができます。学校種が進むにつれ、求められるコミュニケーションスキルが多様化していることが分かります。この因子を活用することで、児童生徒や学級等の全体的な傾向を効果的に把握することができます。

学校種	因子	因子の説明
小学校（低・中学年）	主張性因子	自発的に相手とかかわり、自分の考えを主張する力
	規律性因子	学校のルールを守り、集団生活に適応する力
小学校（高学年）	主張性因子	自発的に相手とかかわり、自分の考えを主張する力
	協調性因子	他者を気遣ったり、集団生活に適応する力
中学校	関係維持因子	他者と良好な関係を保ち、励まし合う力
	仲間強化因子	仲間と高め合ったり、影響力のある発言をする力
	自己統制因子	衝動性を抑え、良識に基づく意思決定を行う力
高等学校	関係維持因子	他者と良好な関係を保ち、励まし合う力
	仲間強化因子	仲間と高め合ったり、影響力のある発言をする力
	自己統制因子	衝動性を抑え、良識に基づく意思決定を行う力
	援助要請因子	身近な人に相談したり、悩みを打ち明ける力

3 「ほっと」の実施手順

「ほっと」を実施するに当たり、どのような手順を踏めばよいのでしょうか。

① 児童生徒への「振り返りシート」の配付及び回答の実施

※「振り返りシート」は前ページ参照

※各段階の質問数は次のとおり

- 小学校低学年【15 問】
- 小学校中学年【19 問】
- 小学校高学年【20 問】
- 中学校【21 問】
- 高等学校【24 問】

→ ② 児童生徒が回答した「振り返りシート」の結果の入力（Excel シート）

↓ ③ 集計結果の表示（グラフ）

↓ ④ 集計結果の分析及び今後の生徒指導の改善充実に向けた具体的な方策の検討

4 「ほっと」の主な結果表示と分析ポイント

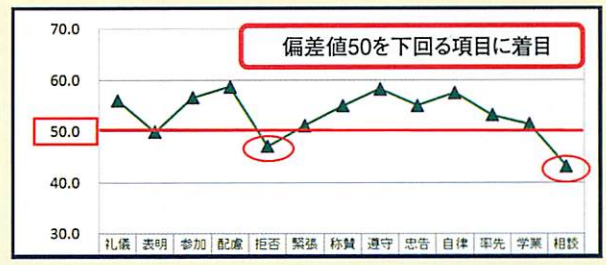
児童生徒が回答した「振り返りシート」の結果を入力した後、コミュニケーションスキルの状況がどのように表示され、どの部分に着目すればよいのでしょうか。（注）説明上、グラフの色等を変更しています。

①13要素偏差値

コミュニケーションスキルの13要素の偏差値が折れ線グラフで表示されます。

【分析ポイント】

偏差値50を基準にして、その高低により、児童生徒や学級におけるコミュニケーションの得意・不得意の状況を把握することができます。50を下回っている要素に着目し、今後の手立てを考えてみましょう。

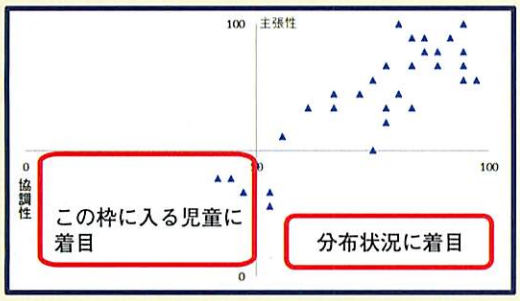


②因子得点

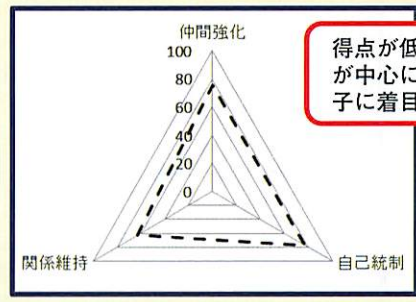
因子得点が散布図又はレーダーチャート図で表示されます。小学校は２因子構成のため散布図で表示されますが、中学校は３因子、高等学校は４因子構成のため、レーダーチャート図で表示されます。

【分析ポイント】

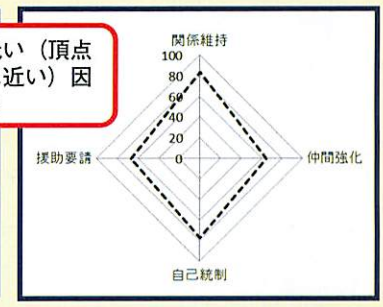
散布図の場合は分布状況、レーダーチャート図の場合は大きさや形の偏りなどにより、児童生徒や学級におけるコミュニケーションの得意・不得意の状況を把握することができます。得点の低い因子に着目し、今後の手立てを考えてみましょう。



【例：小学校高学年】



【例：中学校】



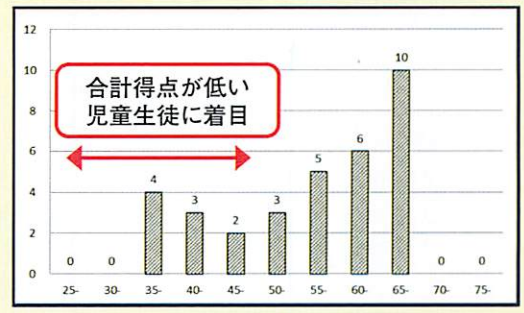
【例：高等学校】

③合計点の偏差値と人数の分布

学級等の集団において、児童生徒の合計点の偏差値の分布状況が棒グラフで表示されます。

【分析ポイント】

合計点の偏差値が低い児童生徒ほど、コミュニケーションスキルに課題が見られる可能性があります。棒グラフの偏り等により、集団におけるコミュニケーションの状況が把握できるとともに、課題となる可能性をもつ児童生徒を特定することができます。合計得点が低い児童生徒に着目し、今後の手立てを考えてみましょう。

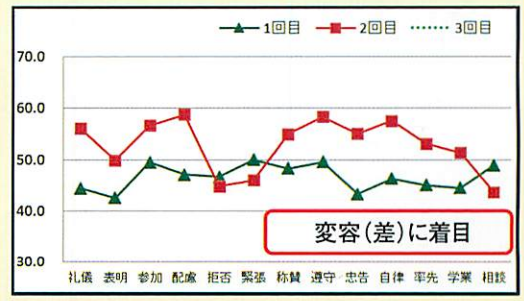


④集計結果の比較

「ほっと」を複数回実施した場合、集計結果を同一グラフ上で比較することができます。この比較する機能は、「13要素偏差値」だけではなく、「因子得点」「合計点の偏差値と人数の分布」についても実行することができます。

【分析ポイント】

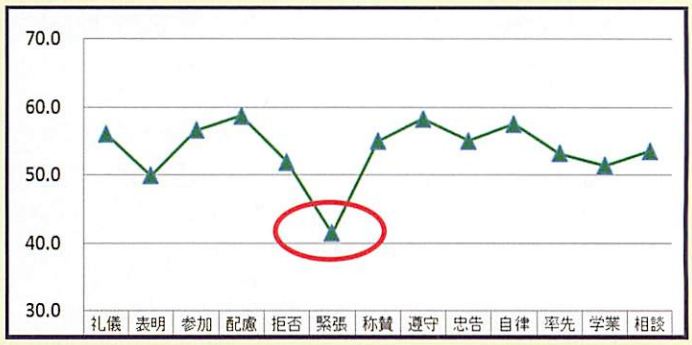
この比較をとおして、児童生徒や学級のコミュニケーションの状況の変容を把握することができます。変容した項目に着目し、これまでの教育活動の成果検証の実施や、今後に向けた改善等を考えてみましょう。



5 「ほっと」の活用例

「ほっと」については、学校の実情に応じて、様々な活用がなされているところですが、先ほど示した結果表示を用いて、どのような活用がなされているのでしょうか。

【活用例１】課題の明確化

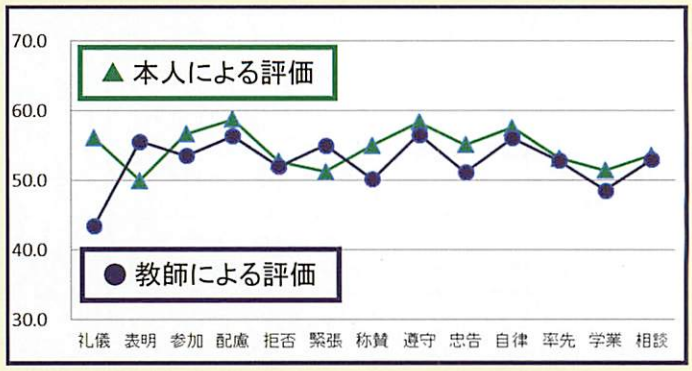


学校の教育活動において、児童生徒のコミュニケーションスキルの向上を図るため、具体的にどのようなスキルが課題なのかを「ほっと」の実施により把握します。

具体的には、コミュニケーションスキル13要素のうち、偏差値50を下回るスキルを課題として捉え、当該スキルを向上させるための教育活動を取り入れていきます。

例えば、右図のようなグラフを示す学級では、「緊張」のスキルが課題となっていることから、相手にどのように思われるか不安で、本音を言いにくい状況にあると感じているとともに、失敗するかもしれない場面を避け、他者の評価に敏感になっている傾向があります。方策として、授業において間違いが認められる雰囲気をつくったり、学校行事等において自信をもたせる場面を繰り返し設定したりすることなどが考えられます。

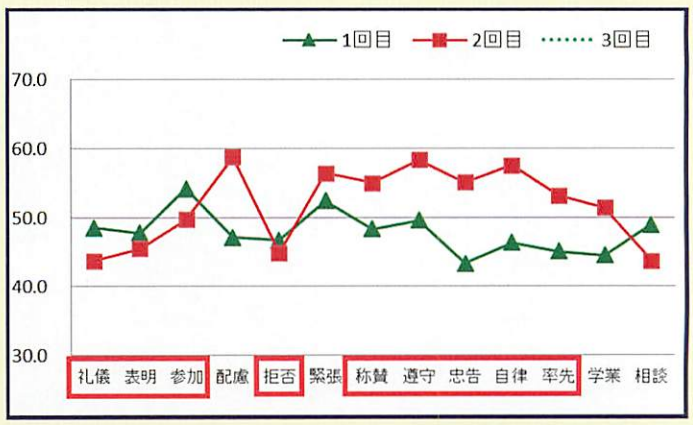
【活用例２】児童生徒理解の充実



教師が児童生徒一人一人の状況を「ほっと」に回答した結果（「教師による評価」）と、児童生徒本人が回答した結果（「本人による評価」）を比較することにより、児童生徒本人が思っているコミュニケーションスキルの状況と教師の目から見た児童生徒のコミュニケーションスキルの状況の違いを知ることができ、児童生徒理解の充実を図ることができます。

「ほっと」は、児童生徒本人が回答することから、児童生徒によっては、過大評価していたり、過小評価していたりすることがあります。外部の視点である「教師による評価」との違いを知ることで、児童生徒へのアプローチの仕方のヒントを与えてくれます。

【活用例３】教育活動の効果測定



学校の教育活動をとおして、コミュニケーションスキルの向上の取組を行った場合、その取組が効果的であったかどうかを知ることができ、ＰＤＣＡサイクルに基づいた教育活動の実践を進めることができます。

例えば、１回目を４月、２回目を翌年１月に実施することで、１年間の教育活動の成果を見ます。右図のような結果を示す場合、「称賛」「遵守」「忠告」などの集団を維持するスキルを向上させることができた反面、「礼儀」「表明」「参加」「拒否」などの主体的に行動するスキルを伸ばすことができていないという結果を受け、次年度以降の取組をどのようにするかを検討します。

「ほっと」に関係する情報については、次の Web ページに随時掲載する予定です。
北海道教育庁学校教育局参事（生徒指導・学校安全）Web ページ
http://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/hk/ssa/hot.htm